2014 年 1 月 31 日

日本クレア株式会社見学報告書

人類進化モデル研究センター
技術職員　夏目尊好

1 月 16 日に日本クレア株式会社八百津生育場を見学した。以下に見学について報告する。
・同行者：中村克樹教授、三輪美樹研究員、森本真弓、石上暁代（技術職員）

日本クレアの八百津生育場は、近くにある自動車部品工場とさほど変わらない外観をしており、周辺に民家が少ない里山に建っていた。外からは音も臭いもまったく感じなかったので、八百津生育場を知っている人以外はその建物内でマーモセットが飼育されていることに気付かないだろうと思った（写真 1）。

八百津生育場には、約 1600 頭のコモンマーモセットが飼育されており、11 人のスタッフで管理していた。昨年の繁殖数は約 400 頭で、子どもの生存率（離乳率）が 80%を下回ってしまうと、事業として成り立たなくなるとのことだった。1 度に 3 頭の子どもを生む親が多いため、3 頭のうちの 1 頭は人工哺育で育てられていた（写真 2）。人工哺育の子どもには成長の度合いによって最大で 1 日に 4 回の授乳をおこなっており、その手間を考えると 11 人のスタッフで作業を回していくのは大変だと思った。生後 7 ヶ月になると出荷対象として親から離し、子どもだけの群れを作って 2 才までには出荷しているそうだ。

飼育室は、繁殖ペア、老齢個体、幼齢個体部屋に分けられており、どの飼育室も両側の壁にぎっしりとケージが二段になって並んでいた（写真 3）。幼齢個体部屋のみ 3 頭以上で飼育されており、それ以外の部屋は 1 頭または 2 頭で飼育されていた。餌はそれぞれの年齢ステージに合わせたものが準備されており、固形飼料（SPS）を基本にしてゆでたまごやパン、カステラ、白米、チキンミールなどが与えられていた。顎の力が弱ったり、歯が抜け落ちたりしている老齢個体には SPS をふやかすなどの配慮がなされていた。霊長研ではこれほど幅広い年齢層のマーモセットを見たことがないので、老齢になるにつれて現れる身体の変化を実際に見ることができてとても参考になった。

飼育ケージには、多くの工夫がなされていた。中でも印象的だったのは、ケージ正面の格子の間隔が左右両端ほど狭くなっていたことだ（写真 4）。これはケージを並べて設置したときにマーモセットがケンカするのを防止するための工夫だった。ケージ間に板を設置するよりもコストを抑えることができるのだそうだ。求める効果とそれを得るためのコストの両方を考えることは、今の私には不足している意識だと思うので、これを参考にしっかりと意識していきたいと思った。また、ケージ内には段ボールや牛乳パックで作った隠れ場所が設置されていた（写真 5）。霊長研ではほとんど使わない素材だったので驚いたが、マーモセットはよく利用していた。霊長研にそのまま導入することは難しいが、何かの形で参考にできたら良いなと思った。

今回の見学では、実験動物施設としてのマーモセット飼育の現場を見ることができてとても勉強になった。八百津生育場と同じように霊長研で飼育することは難しいとが、今回の見学を参考に霊長研でのマーモセット飼育をよりよいものにしていきたいと思う。

写真 1. 八百津生育場の外観

写真 2. 人工哺育

写真 3. ケージ室内

写真 4. 飼育ケージ
（前面、天井の格子間隔が両端ほど狭い）

写真 5. 段ボールや牛乳パックを利用した隠れ場所